戦中戦後・母子の記録 第三巻

限りなき力

限りなき力

戦中戦後・母子の記録　第三巻

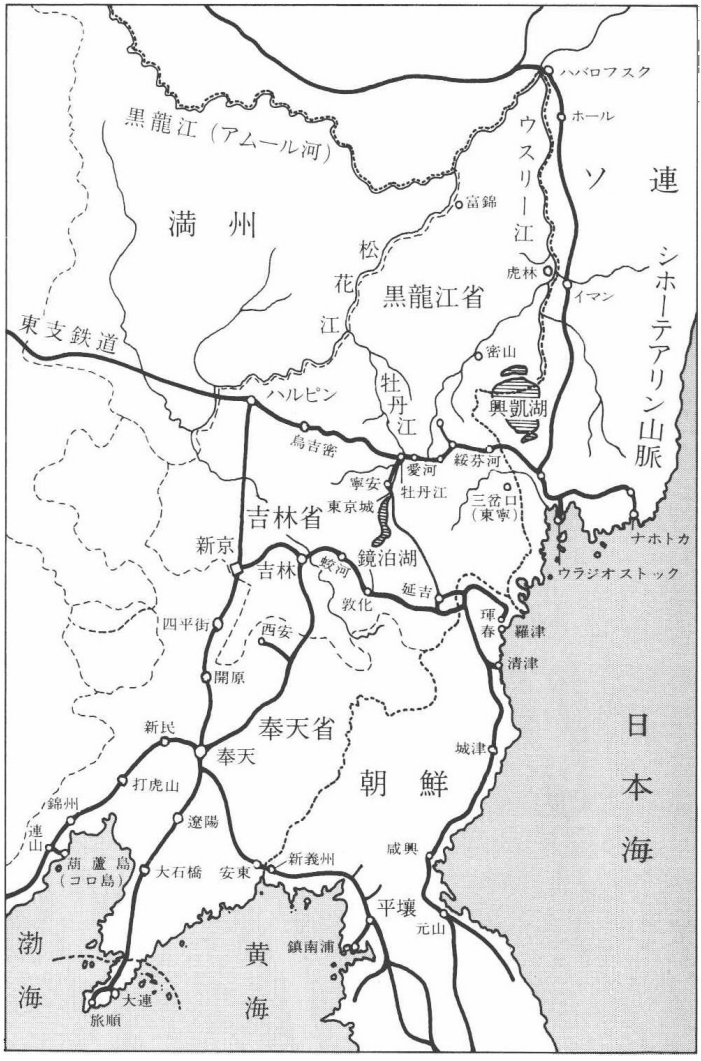
香ゆたかに沈丁花、色鮮かに菜の花、庭の紅梅に鶯。すべてが春を告げるような季節のふし目を感じさせる、ここ山科の里でございます。

三巻も、どうやら完成いたしました。一巻・二巻…と続きますうちに、小さな輪もしだいに大きく広がり、多くの反響を呼ぶようになってまいりました。相変わらず本作りにはいっこうに馴れる様子もありませんが、なによりもその手応えに勇気づけられる今日この頃です。

日本国中から寄せられた原稿も数多く集まり、引き続いて八巻迄月を重ねる毎に発刊できる運びとなりました。三巻をもう少し早くと予定しておりましたが、多数の原稿整理の為手間どりましたことをおわび申し上げます。

編集委員　松　美子
　　越山田鶴子

戦中戦後・母子の記録　第三巻
限りなき力
昭和五十四年三月十日　印刷
昭和五十四年三月十四日　発行
発行者　笠原政江
京都市山科区大宅岩屋殿二番地
電話（〇七五）五七一―五二六六番
印刷者　古澤秀朗
京都市南区唐橋羅城門町二十一番地
電話（〇七五）六七二―五三七一番
（非売品）


ハバロフスク
ホール
黒龍江（アムール河）
ウスリー江
ソ　連
富錦
満　州
松
花
江
黒龍江省
虎林
イマン
シホーテアリン山脈
東支鉄道
密山
牡
丹
江
興凱湖
ハルピン
烏吉密
綏芬河
愛河
寧安
牡丹江
東京城
三岔口
（東寧）
吉林省
ナホトカ
新京
吉林
鮫河
鏡泊湖
ウラジオストック
延吉
敦化
琿
春
羅津
四平街
西安
清津
開原
新民
奉天省
奉天
城津
日
本
海
打虎山
朝　鮮
錦州
遼陽
連
山
葫　蘆　島
（コロ島）
大石橋
安東
新義州
咸興
平壤
元山
渤
海
黄
海
鎮南浦
大連
旅順

満州国関係図

慚愧懺悔の日々

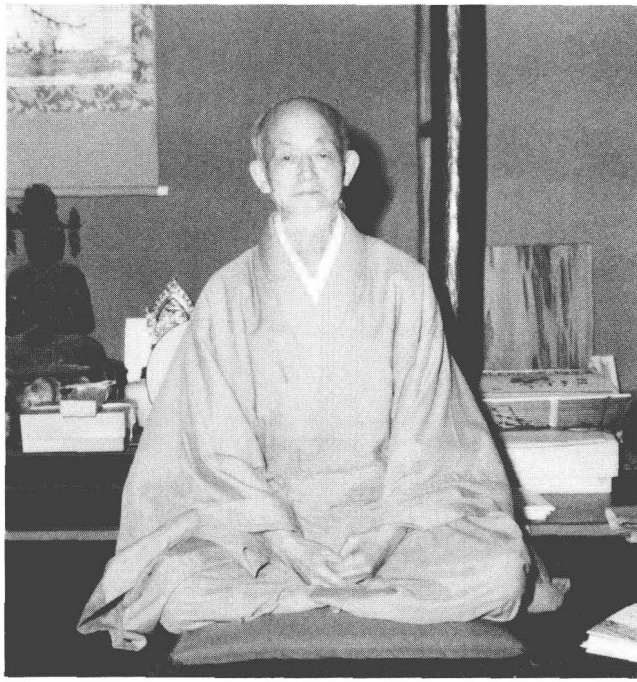
山田無文

古い古い話のように思いますが、戦争が始まったのが昭和十二年でしたか、当時わたくしはまだ雲水で、京都の嵐山の天龍寺で、坐禅の修行をして居りました。いわゆる日支事変が始まりますと、寺内将軍が総司令官として出征されることになりました。

その時、将軍はわざ〳〵京都の天龍寺まで、私の師匠、関精拙老師を訪ねて来られました。お二人でヒソヒソと密談されて帰られました。考えて見ますと、将軍の心中は戦争に反対して居られたのではないかと思います。少くとも勝利のご自信が無くて、その苦衷を老師に訴えるために来られたように思います。そして将軍は間もなく大陸へ渡られました。

坐禅の修行が五月、六月、七月と三箇月続きますと、十月迄修行は休みになります。八月の休暇になると、管長が北支へ寺内将軍を慰問に行くと云い出されました。その時

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



私は侍者として居りましたので、当然管長のお伴をして北京の総司令部へ参ったのであります。暫らく北京の本部でお世話になり、更に中国各地の部隊を慰問して廻ったのであります。

本部に滞在中、将軍が管長に兵隊たちの為に法話して欲しいと頼まれました。すると管長は「わしは話は不得手だから、お前代わりにやっておけ」ということになって、北京の司令部を皮切りに中国到るところ、あらゆる部隊で私が至らぬ法話をさ

せられたのであります。

ところがまことに汗顔の至りで、若気の至りと申しますか、当時の風潮に便乗したと申しますか、至るところで私は兵隊さん達に激励演舌をして了ったのです。お国の為に、天皇陛下の為に、生命惜しまず戦って下さいと、激烈な好戦演舌をぶって了ったのです。併し日本は遂に数知れぬ犠牲者を出して、敗戦の憂目を見て了ったのであります。敗戦の悲惨に直面すると同時に、若気の至りとは云へ、空しく戦死を激励した数限り無き英霊の方の前に、私は心から慚愧陳謝せずには居られなくなりました。

毎歳、何回となくご遺族の皆さまのお伴をして、ハワイを始めとして太平の島々から、ビルマの果に至るまで、英霊方に感謝と共に慚愧懺悔のお詫びをして、二度と戦争の無い、恒久平和な世界を祈って止まないのが、今日の私であります。

（臨済宗妙心寺派管長）

第三巻　発刊にあたり

笠原政江

数多くの方々から励ましの言葉を沢山戴き、ここに第三巻の運びとなりました。皆様の血のにじむ体験の数々に、よくぞ耐えてこられたと頭が下ります。

余りにも自由で、食べるもの、着るものすべてが満ち溢れ、目まぐるしく変わる流行で、使い捨て、着捨てが美徳のようにいわれる今日。何の努力も、何の苦労もしないで手に入る時代……。

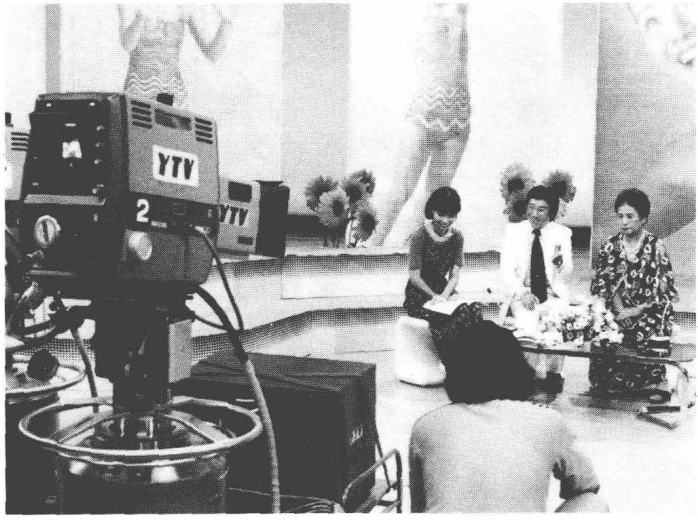
平和な平和な今の時代に何故！我が子をロッカーにすてる母親、子供をすて家出する母親、育児ノイローゼで自殺する母親。子供を巻きぞえの犯罪、こんな暗いニュースが後を断ちません。ひたすらに子供を飢えさせまいと我身を忘れて子育てをし、はげんだ我々の時代には全く考えられなかった事です。

この無責任な母親の行動は、耐えることを必要としない現代の放まんさが弱い母親を作っているのだと思えてなりません。母親としての自覚と責任……どんな事態にも耐えられる忍耐力を持つことこそ、次の世代を育てる母親として、何にもまして大切なことではないでしょうか。

第一巻冒頭の「忍ぶ者こそ強し」という格言をじっくりかみしめて、強くたくましく生きていただければ、私のこの記録集刊行に対する情熱も報われるのではないかと愚考しております。

笠原政江

明治四十五年五月一日、三重県上野市市部川原に生まれる。横浜市神奈川高女卒、伊賀上野より京都油小路四条上る染料商植村家に嫁す。昭和十八年、主人応召北鮮に入隊、戦後シベリヤに抑留。その後子供、しゅうとめをかかえ、染料商をやめ旅館営業に移る。昭和二十七年楠荘設立、現在に至る。



去る五十三年八月二十八日、読売テレビ局より依頼を受け、出演した時の写真です。

この時には第一巻に投稿されました、吉行シズさんも共演下さり、約四十五分間にわたり私のことと、「戦中・戦後母子の記録」の話を致しました。

この出演が、皆様の共感を呼び、電話は鳴りづめ、問い合せの手紙のお返事に追われ、一度に原稿が多数集まって参りました。

やはりテレビの力は大きいものだなあ…と感心しておりますが、何につけても貴重な、それ〳〵違った体験の女性が沢山おられ、その方達もご自分の経験を、子供や孫や次の世代の人達に残しておきたいと考えておられることがよくわかり、益々この仕事の完成に力を入れている今日この頃です。

目次

（順不同）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ひろしま …… 金野紀世子 5
悲　望 …… 森田　嗣子 14
地獄の長柄橋 …… 中島千鶴子 27
先立って行った人 …… 上田　キヌ 35
流れ星 …… 前川　幾代 46
ワタチ白いごはん食べたい …… 市原とし子 63
ふるさと …… 橋本まさ子 69
悲劇の女子勤労奉仕隊 …… 今井百合子 77
妻で在った日 …… 井上かめの 87
悲劇の母満州に散る …… 柴田　正雄 92
吾子の絶唱 …… 鈴木　松子 101
保健指導婦のうた …… 井上　早苗 107
花の散る四月 …… 柳田　綾子 113
心に太陽を唇に歌を …… 富田美代子 119
夜明けの夢 …… 宮下　唱 138
三十三年忍び草 …… 唐島田豊子 143

愛児あればこそ……田中　すゑ　151
本堂に疎開児童を迎えて……天児　篤子　157
悲しい思い出……佃　さわ　166
海にすてた青酸カリ……三谷恵美子　177
ああ敦化神戸開拓団……碁盤　保江　183
鍬の豆……高橋　菊江　209
夏帯のリュックサック……砂口　豊子　215
悲しみにも苦しみにも「こんにちは」……勝間田すむ　226
ふるさとを追われて……西　光江　239
三姉妹……渡辺　弥生　249
君はこの世のいずこにもなし……黒田　セイ　261
歩みつづけて今ここに……池本　淑子　268
戦中戦後を生きぬいて……長田寿恵子　274
ブーゲンビル島の父へ……細山田千代子　281
悲しい満月……西村　和子　290
三代の対話……村上　美代　309

題字

北法相宗（清水寺）宗務長

松本大圓

ひろしま

大阪府豊中市服部寿町2ノ14ノ18
金　野　紀世子（56才）

幼き日の広島の思い出を追慕する。

夕暮れの街の向こうから、天秤棒をかついだ『牛のきも売り』のおじさんがやって来る。

「キモォー、キモォー、とりのキモー、牛のキモー」

暮色に溶けて次第に近づいて来るその声は、今でも耳の底で海鳴りのように残っている。夕方になると、祖母と私は床几を出し、夕焼けの空を眺めていた。

私は大正十一年の十二月、広島の母の実家で生まれた。生後ずっと体の弱かった私は、三歳位まで阪神間の深江の家で育った。妹が生まれるため、私はまた広島の祖父母の許に預けられ、七歳までを広島で過ごした。

祖父は長い間、呉の海軍工廠の組長を勤めた人で、退職後は広島市尾長町の尾長小学校の傍で文房具店を営んでいた。古武士然とした祖父だった。

体が丈夫になるからと、祖母はいつもきもを買ってくれた。おいしく煮つけて食べさせてくれるので、私はきもが大好きになった。祖母と並んで床几で涼んでいると、尾長小学校の児童達の歓声がワァーワァーと風に乗って聞こえて来た。

遠い遠い昔日の思い出である。

入学のために深江へ帰った。その後、祖父母と再会したのは、私が旧制高女五年の時だった。南九州一周の卒業旅行の帰途、厳島神社へ参詣するので、広島で祖父母に会うべく連絡をとっておいた。

宮島へ着いたのは朝早かった。桟橋のほとりの大きな旅館の前でみんなと喋っていると、白髪の上品なおじいさんが立っている。白麻の着物に、黒い紗の羽織を着たその人は、私達の方をじっと見ている。おじいちゃんじゃないかしら。私もそんな気がした。

「きよ子か」

祖父は宮島まで来てくれたのだった。

「あっ、おじいちゃん」

なつかしさのあまりとびつく私に、十一年ぶりで会った祖父はニコニコと微笑んでいた。

宮島から広島への汽車の中、向かい合った座席で何を話したのだろう。母からことずかったウニの瓶詰めを手渡したことを覚えている。

汽車がゆっくりと広島駅へ入って行く。車窓越しに見ると、おばあさんが一人立っていた。祖母だとすぐ判った。停車と同時に私は飛び降りるようにホームを走った。

「おばあちゃん」

駆け寄ると、祖母は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com